

看護大学生の適応感に及ぼす要因の検討(2)

○久米瑛莉乃 (広島文化学園大学大学院教育学研究科・IWAD 環境福祉リハビリ専門学校)・橋本翠 (吉備国際大学)・池田龍也 (広島文化学園大学)

キーワード：看護学生, 適応感, 抑うつ, 学年間比較

目的

一般的に, 大学生にとって多くの時間を費やす学校に“適応できている”という感覚はとても重要である。学校における主観的適応感, 精神的健康と関連することが示されている(大久保, 2005)。看護学生のような専門的知識を修得する大学生にとっても, 自分が選んだ学校に“適応できている”という感覚は精神的健康にも影響を及ぼすことが推測される。精神的健康を維持するためにも, 学校に“適応できている”と感じられることは重要である。徳永ら(2012)は, 大学生の適応感にどのような要因が関連しているのかについて検討している。その結果, どの群においても“劣等感のなさ”と“抑うつ感”との間に比較的強い相関があった。

そこで, 本研究では, 徳永ら(2012)の研究手法を踏襲し, 看護学科の1年生から3年生までを対象とし, 看護学生の“抑うつ”と大学への適応感に及ぼす要因との関連について検討することを目的とした。

方法

対象者：P 県内にある X 大学の看護学部看護学科に所属する1年生(116名), 2年生(113名), 3年生(111名)の計 340 名が調査に協力。その内, 欠損値のあるデータを削除した1年生(104名), 2年生(110名), 3年生(107名)の計 321 名を分析対象とした。

質問紙：①学校への適応感尺度：大久保(2005)が作成した適応感尺度 30 項目を 1.まったくあてはまらない～非常にあてはまるの 5 件法で評定。

②抑うつ尺度：Zung(1965)が作成した SDS(Self-rating Depression Scale)の日本語版(福田・小林,1973)の 20 項目を 1.ないかたまに～4.ほとんどいつもの 4 件法で評定。

③フェイスシート：性別, 年齢, 入学年度, 学内サークルへの有無, アルバイトの有無, ボランティア活動の有無, この大学を受験し, 入学を決めた理由。

【倫理的配慮】書面および口頭にて, 調査への参加は自由であること, 個人を特定しないこと, 研究以外に回収したデータを活用しないこと, 回答をもって調査協力への同意とみなすことを説明した。

【利益相反開示】公開すべき利益相反は存在しない。

結果と考察

記述統計量 大学へ適応感と抑うつとの記述統計量を学年別に算出した結果を Table1 に示す。

劣等感のなさ以外の要因では, 2 年生が最も高いことが示された。また, “劣等感のなさ”及び“抑うつ”は 3 年生が最も高いことが示された。

変数間の関連 大学への適応感を構成する 4 要因と“抑うつ”

Table1 記述統計量

		居心地の良 さの感覚	課題・目的 的存在	被信頼・受 容感	劣等感の なさ	抑うつ
1年	平均値	41.97	28.02	17.40	14.80	43.74
	標準偏差	8.74	5.26	4.40	4.64	8.37
2年	平均値	44.43	29.15	19.70	15.57	44.17
	標準偏差	7.60	4.76	4.84	4.77	7.81
3年	平均値	39.57	25.39	16.98	15.65	44.27
	標準偏差	6.61	4.56	3.97	3.22	6.39

Table2 大学への適応感と抑うつとの関係

	居心地の良 さの感覚	課題・目 的的存在	被信頼・受 容感	劣等感の なさ
1年	-0.43 **	-0.36 **	-0.58 **	0.59 **
2年	-0.35 **	-0.33 **	-0.43 **	0.45 **
3年	-0.33 **	-0.35 **	-0.33 **	0.42 **

* $p < .05$ ** $p < .01$

との関連について学年別に算出した結果を Table2 に示す。

その結果, 大学への適応感と“抑うつ”については, 全学年で“劣等感のなさ”以外の 3 要因で有意な負の相関を示し, “劣等感のなさ”については, 正の相関を示した。

このことから, 1 年生では, “居心地の良さの感覚”, “課題・目的的存在”および“被信頼・受容感”が増すと, “抑うつ”が抑制されることが示された。特に“被信頼・受容感”の高さと“抑うつ”の低さは顕著であった。2 年生と 3 年生では, “劣等感のなさ”と“抑うつ”との関連が最も高かった。“劣等感のなさ”は, “役に立っていない”や“嫌われている”等のネガティブな項目であることから, 劣等感が高まると抑うつ感も高まる可能性が示唆された。学年が上がると, 国家試験や就職試験など看護学生としての現実に直面するため, 劣等感を感じやすい。低学年から劣等感を感じない為のサポートが重要になると考える。本研究では適応感と関連する要因として“抑うつ”しか扱わなかったため, 全般的な精神的健康度や精神病理も視野に入れる必要がある。他にも, 看護学生の大学適応感に関連する要因として, 例えばアイデンティティや Big-five などの人格特性についても検討する必要がある。

引用文献

大久保智生 (2005). 青年の学校への適応感とその規定要因- 青年用適応感尺度の作成と学校別の検討- 教育心理学研究,53,307-319.

徳永智子・榎本俊哉・三島瑞徳・小山典子(2012). 大学生の適応感と大学生活における要因の関連 宇部フロンティア大学大学院附属臨床心理相談センター紀要,9

福田一彦・小林重雄(1973). 自己評価式抑うつ性尺度の研究 精神神経学雑誌, 75, 673-679.

(KUME Erino, HASHIMOTO Midori, IKEDA Tatsuya)